

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

母系社会の構造：サンゴ礁の島々の民族誌

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008405

序 母系社会とはなにか

「母系のパズル」ということばがある。⁽¹⁾母系社会の男性は兄弟として、夫として、父親としてそしてオジとして、相反する役割を負わされている。父系社会においては、男性は子どもを育て、自分の財産や社会的地位を、子どもとくに息子に相続・継承させるのが普通である。それにたいし、母系社会では祖母、母、娘というように、代々女性の血縁関係（出自）をたどって、社会集団（家や家族）をつくりあげ、相続・継承の方法を決定する。男性の血縁というものはまったくといってよいほど役にたたない。男性とその子どもゆあいだには、いっさいの母系的血のつながりがないからである。男性はいっしょに住み育てあげた子どもであっても、自分の子として自分のあらゆるものを譲るわけにはいかない。

ミクロネシアのトラック島の男は、「自分の子どもと姉妹の子どもを天びん棒でかつがなければならぬ」という。これは自分の子どもが可愛いからといって、実子だけを世話してはならないことを意味している。男性にとって、自分と母系の血を同じくするのは、実子でなくて彼の姉や妹の子どもである。甥や姪にも、実子と同じほどの気くばりをしないと、男性は自分の母系一族の人びとから、心のせまい男としてみられ、相手にされなくなってしまう。たとえ、島の大酋長であったとしても、その名誉ある

地位を彼の子どもにはなく、姉妹の息子に譲る。男性が管理、監督している一族の土地もほとんどは姉妹の子どもの手に入ってしまう。つまり、母系社会では、男性の地位や監督権というものは、実子には譲渡できないしくみになっているのである。母系社会で暮らすそのような男性の身の処しかたと愛情の葛藤を示したのが「母系のパズル」なのである。

母系社会の多様性

男性の権威や支配・管理権が分散する母系社会においては、どのようにして社会集団をつくりあげているのであろうか。男性がその権威を行使するうえで重要になってくるのは居住の問題である。結婚後、男性がどこに住むかということである。父系社会においては、おおむね夫（父）方居住、つまり嫁入り婚をする。しかし、母系社会においては、いろいろな居住の形態がみられる。

一つは、妻問いと訪妻婚といわれるものである。この居住形式は、結婚後、花婿が花嫁の家を夜だけ訪れ、朝になると自分の生家に帰るものである。インドのケララ州のナーヤル・カーストの人びとや、インドネシアのスマトラに住むミンカバウ族のあいだでみられた。ナーヤルの男性は、生涯通い婚をつづけ、妻に子どもができて、その子にたいする教育的、経済的責任をいっさい負わない。男性は戦士として数ヶ月も村を留守にすることが多かったからであろうか。子どもは母の家で母系一族の人びとと生活する。その家の土地（田畑）からとれる食料で、母の兄弟をはじめ一族の人びとの手で育てられるのである。つまり、ナーヤルの「父親」には、われわれの社会におけるような、父親として子どもの

養育にかかわる権利と義務が存在しないのである。⁽²⁾ ミナンカバウの社会でも、夜ごとに妻のもとへ通う夫は「水牛の尻にいるハエ」にたとえられる。「風が吹けば飛んでしまふ存在」で、妻の家には大きな役割をはたさない男とみなされるからである。この社会の男性は村を離れて町へ出稼ぎに行くものが多い。父親は子どもに自分の甲斐性で手に入れたものを贈る自由があるので、父子関係がナーヤルのそれより強いとはいえる。しかし、男性は妻の家で病気になる現実家へ追い帰されるし、死んでも妻の墓には入れない。⁽³⁾ このように、訪妻婚をとる母系社会の男性は、自分の子どもとのむすびつきより、彼の母系一族の成員との関係を大事にするのである。

つぎの形態は、妻(母)方居住、つまり婿入り婚で、これは母系社会にひろくみられる。日本でも「小糠三合あるなら入り婿に行くな」ということわざがあるが、母系社会の婿の地位はまことに低い。夫婦の紐帯も弱い。台湾のアミ族の婿は妻や子どもが寝坊していれば朝飯を炊き、日中は田畑の仕事に精を出し、夕方は最後に家へ帰る。夕食も御馳走には箸をつけず早めにすませ、夜なべ仕事にとりかかる。一日中仕事に追われ、子どもとゆっくりすごす時間もないほどである。子どもをしつけるのは、もっぱら妻であり、子どもの過ちにお仕置をするのはその母方のオジであるという。そのうえ、夫は妻の兄弟には頭があら⁽⁴⁾ない。父親および夫としての男性にとって立つ瀬がない社会ともいえる。

インドのアッサム地方のカーシ族では、婿は妻の家の「付け足し成員」とみなされ、妻の兄弟やその母方オジの指示に従って働く。婿は婚家で辛い立場におかれるため、自分の姉妹の家で大部分の時をすごすとい⁽⁵⁾う。一時代前の日本の家の「嫁づとめ」でも、そんなに厳しくはなかったと思われるほどである。しかし、両社会の婿は婚家先ではみじめな境遇にあるが、彼の母系一族においては、先祖伝来の財

産（土地）の管理や処分にたいする絶大な権利をもち、その成員を支配する実権を掌握している。婚家での妻の兄弟との関係も、自分の姉妹の夫たちとのあいだでは逆転する。婿として婚家で地位が低い存在の男性も、自分の一族という母系出自集団においては「強い男性」に変身するのである。妻方居住をとる母系社会は、女性たちが母系一族の本拠地にとどまり、婿にでた男性成員が遠方から一族の財産や人びとをコントロールするしくみになっている。

三番めの形態は、夫（父）方居住、つまり嫁入り婚の居住様式である。この方式のもとでは、男女とも父の家で生れ、息子はそこで結婚し、娘は夫の家へ嫁ぐ。そのため母系一族の男女とも分散してしまいい、その本拠地でその財を管理・運営するものがいなくなる。それをふせぐため、男性は結婚したら自分の一族の本拠地に移り住むという居住規制をあわせもっている。つまり、男性は独身時代を父親の村（家）で暮し、嫁を迎えてから母方オジがいる自分の村へ移って生涯を終えるのである。このような父方―母方オジ方居住をする母系社会で有名なのが、パプアニューギニアのトロブリアンド諸島である。この社会の「父親」は子どもを抱いてあやしたり、食べものを口に運んでやったり細やかな愛情をもって子育てにはげむ。「父の手は子どもの糞尿で汚れっぱなし」といわれるほどである。子どもを一人前にするのは、母親や母系一族の人びとではなく育ての父親の責任とされる。子どもの訓育に関して、母方オジが全面に出ることはない。それで子どもは父親に敬意を払うという。

このような父親像も、母系出自というしくみのまえてははかないものでしかない。島の人びとの信仰では、夫たる男性は妻を妊娠させ、子どもを生ませるうえで、何のはたらきもしていないとみられている。子どもは母系祖先の生れかわり、パロマという祖霊が母系子孫の女性の胎内に入ると、その女

性が妊娠するという。さらに、胎児は母胎内で血と肉によって成長するのである。したがって、父子間には「生理的なつながり」がなく、子どもにとっての「父親」は「よそもの」でしかない。子どもは「母の夫」という関係で「父親」と結びつくと考えられている。⁽⁷⁾ 父子間に「生理的なつながり」がなくとも、父親は子どもの養育に専念し、手をかけなければならぬ。しかし、父親が子どもの養育のすべてをひきうけるわけではない。子どもの食べもの（主食としてのヤマイモ）は、母の母系一族の男たち（とくに母の兄弟）によって調達される。彼らはヤマイモの収穫期に大量のイモを子どもの父のところへもつてくる。その量は男の全収穫量の約半分にあたる。この贈物は、男たちが自分の母系一族の成員である子どもを育ててくれるよそもの（父）に、その子育ての労をねぎらうために行われるのである。子どもは成長するにつれて父母と仕事をするようになるが、同時に母方のオジが正規の保護者、監督者として姿を現わすようになる。結婚すると男子は、自分の母系一族の財を管理、相続するために母方オジのもとへひき移る。父のもとへは、それといれかわりに彼の甥夫婦が子どもを連れて越してくる。トロブリアンドの母系集団は、その既婚男性成員が本拠地に集結し彼らの権威にもとづいて運営されるのである。

居住様式がどうあれ、母系社会はつまるところ、子どもからみれば父と母方オジ、父の立場からすれば実子と甥・姪という重層した人間関係のもとに成立しているのである。そして、母系出自は男性が子どもとの関係を犠牲にし、ゆくゆくは自分のすべての子どもを他者（妻一族）に譲り渡すというシステムともいえよう。⁽⁸⁾ 一方、女性の立場からみれば、生涯にわたって彼女は、夫ではなくて兄弟を頼りにする。つまり、母系集団は夫婦関係でなく、兄弟姉妹関係を軸に形成されるのである。

母系社会と男性の自立

男性の権威や管理権が重層する母系社会の複雑な構成は、父系社会にくらべ社会のしくみとしては弱いと見なされている。したがって、母系社会は父系父権的社会の影響、人口の増加、貨幣経済の波及などの要因でたちどころに崩壊してしまうともいわれてきた。⁽⁹⁾

事実アフリカのタンザニアのある部族においては、一九五〇年代から男性がココア農園で働いたり換金作物を売ったりして現金を手にするようになったため、「一夜にして父系相続・継承へと変化した」という報告もある。⁽¹⁰⁾これは、「男性の経済的自立」によって母系的社会体制が崩れ去ることを示している。ナーヤルの訪妻婚にもとづく母系大家族の形態も、イギリスの直接統治（一八世紀末）以降、変化してきた。部族間戦争の禁止にともない男性が村にとどまり、婿入り婚をするようになったのである。そして、人口の増加によって母系家族の共有地が分割され、男性の家長権が強化されて父子相続が進んだ。さらには男性の現金収入の道が開け夫方居住による核家族が出現するなど、伝統的な母系家族が減少してきている。

母系出自を基盤とする家族は、近代的な産業社会や資本主義社会には適合せず、それらの社会には核家族が機能的であるとも指摘されている。伝統的、農耕的な前産業社会においても、母系制を存続させるには、人口と生産のバランスのとれた比較的安定した経済が必要であるともいわれている。⁽¹¹⁾

しかし、他方で世界規模の経済体制にまきこまれながらも、母系のしくみを根強く維持している社会

もある。ミナンカバウ社会では、今世紀初頭から男性が商業活動に従事するようになって、夫婦のむすびつきと父子関係が強くなってきたが、核家族へと移行してはいない。現象的には核家族に見えても、それは居住と消費の単位として存在するのであり、相続など他の社会関係においては依然として母系の出自原理が基本となっている。ガーナのアシャンティやザンビアのルアラなど、アフリカの多くの母系社会でも、近代化、産業化の趨性のなかで、男女（夫婦）が別べつに現金収入や生産物を手にいれている。⁽¹²⁾しかし、それらの私有は認められず、母系集団の人びとが共同分配・消費するという伝統的な分業と役割分担制のもとに母系体系を保持している。このように、母系社会の基本的イデオロギーとなっている「母系の出自」は、居住様式や相続の方式が変化しても、なかなか変わらない性質のものである。

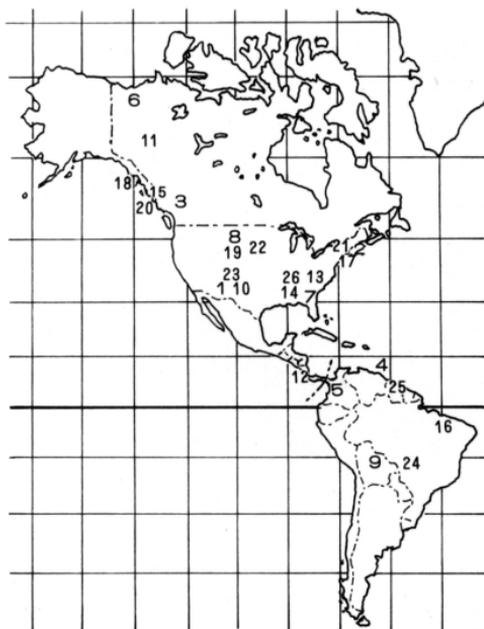
母系社会の分布

現在、どれくらい母系社会があるのだろうか。アメリカの人類学者、ジョージ・P・マードックが分析した、全世界の五百六十三民族（集団）のうち、母系出自を集団の編成原理にしている社会は、八十四を数える。⁽¹³⁾父系出自二百二十三や双系出自百九十九についている。その分布はアフリカ、インド、東南アジア、オセアニアそして北・南米とひろい（図一）。おおまかにいえば、熱帯地方に集中する傾向がある。

生業形態をみるとアフリカやオセアニアではイモ類などを栽培する根茎農耕民の社会に多くみられる。一方で、カナダの太平洋岸に住むハイダ族やトリリングット族、アメリカ・インディアンのホーピ族やナ

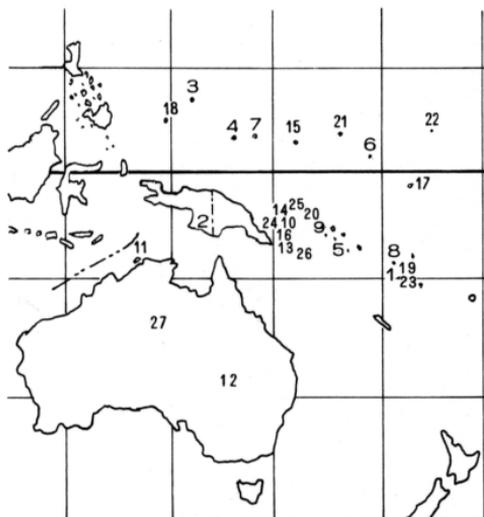
図1 母系社会の分布

各名称は、民族・部族名、島民名などの区別をせず、4地域ごとに五十音順に配列した。



アメリカ

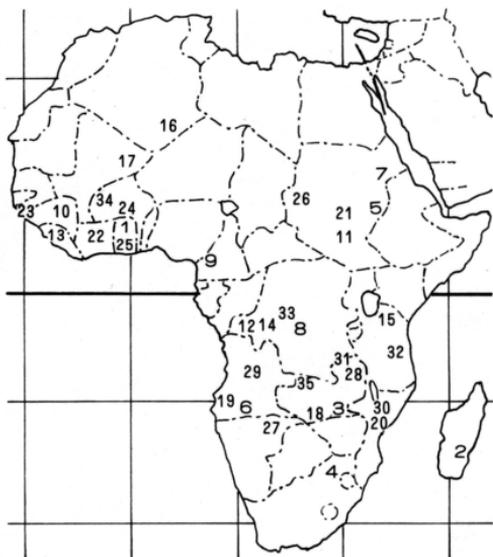
- 1 アパッチ (西部)
- 2 イロクオイ
- 3 カリエル
- 4 カリブ
- 5 グアヒロ
- 6 クチン
- 7 クリーク
- 8 クロウ
- 9 シリオノ
- 10 ズニ
- 11 タナイア
- 12 タラマンカ
- 13 チェロッキー
- 14 チョクトー
- 15 ティムシアン
- 16 ティンピラ
- 17 デラウエア
- 18 トリンギット
- 19 ナヴァホ
- 20 ハイダ
- 21 ヒューロン
- 22 ポーニー
- 23 ホーピ
- 24 ポロロ
- 25 ロノコ
- 26 ユーチ



オセアニア

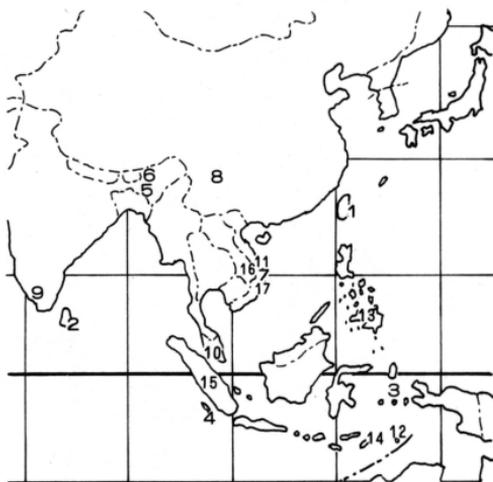
- 1 アオバ
- 2 アスマット
- 3 ウルシー
- 4 オレアイ
- 5 カオカ
- 6 コシャエ
- 7 サタワル
- 8 サンタ・クルーズ
- 9 シウアイ
- 10 スルカ
- 11 ティウイ
- 12 ディエリ
- 13 ドブ
- 14 トーライ
- 15 トラック
- 16 トロブリアンド
- 17 ナウル
- 18 パラオ
- 19 パンクス
- 20 ブカ
- 21 ボナベ
- 22 マジュロ
- 23 ラガ (ペンテコスト)
- 24 ラカライ
- 25 レス
- 26 ロッセル
- 27 ワルビリ

序 母系社会とはなにか



アフリカ

- 1 アシヤンティ
- 2 アンタイサカ
- 3 イラ
- 4 ヴェンダ
- 5 ウドゥック
- 6 オヴァンボ (アンボ)
- 7 クマナ
- 8 クバ
- 9 クバ
- 10 コニアグイ
- 11 コロンゴ
- 12 コンゴ
- 13 シェルブロ
- 14 スク
- 15 デイゴ
- 16 トゥアレグ (アーガレン)
- 17 トゥアレグ (アンテサール)
- 18 トンガ (高地)
- 19 ニヤネカ
- 20 ニヤンジャ
- 21 スバ
- 22 バウレ
- 23 ビジョゴ
- 24 ビリフォル
- 25 ファンティ
- 26 フル
- 27 ヘレロ
- 28 ベンバ
- 29 ムブンドゥ
- 30 ヤオ
- 31 ルアブラ
- 32 ルグル
- 33 レレ
- 34 ロビ
- 35 ンデンブ



アジア

- 1 アミ
- 2 ヴェツダ
- 3 ウェマーレ
- 4 エンガノ
- 5 カーシ
- 6 ガロ
- 7 ジャライ
- 8 ナーシ
- 9 ナーヤル・カースト
- 10 ネグリ・センビラン
- 11 パーナル
- 12 パバール
- 13 ブギッドノン
- 14 ベレ
- 15 ミナンカバウ
- 16 ムノンガル
- 17 ラデ

ヴァホ族、オーストラリア・アボリジニのティウイ族などの狩猟・採集民から、前述のナーヤルやミンカバウのような水田耕作民、カーシ族やヴェトナムのラデ族など焼畑耕作民といった穀物栽培民のあいだにもみられる。どういふわけか、牧畜民社会にはほとんど存在しない。

社会統合の形態からみると、ミンカバウ族のように小王国の政体をつくりだした社会もあるが、大規模な王国ないし高文化を築きあげたのは、おしなべて父系社会である。母系社会は、身分階層が未分化な首長制（国）のような政体と深く結びつくようである。

母系社会の研究

母系社会は、どのような歴史的、社会的、経済的背景のもとに成立したのであろうか。母系社会の形成に関するこれまでの研究のあとをふりかえってみよう。母系社会は、歴史のうえでは父系社会の前段階に出現したとか、女性が生業において主体的な働き手となる分業形態と関連しているという古典的見解がある。

人類史における母権先行説は、一九世紀末の進化論的思潮のなかで生まれた空想の域をでない仮説である。エンゲルスは、財産や富の私有化にともなう母権制から父権制への転化を、「女性の世界的敗北」と位置づけている。だが二〇世紀にはいり、民族学の調査が進むにつれ、女性の出自によって集団を編成する社会であっても女性は政治的権力を手中におさめていないことがあきらかになった。また、女性が植物の栽培を営む原始農耕社会で、農地を母から娘へ相続させる慣行が母系社会へ発展したのだ、

という説にも多くの反証がだされている。すべての原始農耕社会が母系出自をとっているわけではないし、前でみたミナンカバウやアミの社会のように、男性が農耕に従事する穀物栽培民社会でも母系出自が集団編成の原理になっているからである⁽¹⁴⁾。

つぎは、母系社会を母処婚（母方居住）と関連づける視点である。アメリカの人類学者、アルフレッド・クロローバーはインディアン社会を調査し、「ズニ族の母系的慣習は、女性たちが自分の家に住みつけづけることによる」と述べている⁽¹⁵⁾。母系制を母（妻）方居住と結びつけ社会組織論を体系的に展開させたのは、マードックである⁽¹⁶⁾。その視点は、一九五〇年代から本格化する母系社会の社会人類学的研究の主流をなした。インドのナーヤル社会を調査研究したキャサリン・ガフは、「母系の出自集団は歴史のうえで母方居住の方式を優先させた地域で、独自に発展した」と見なしている⁽¹⁷⁾。母系出自の基盤を母処婚におく見方は、それ以後、多くの人類学者に支持されてきている。しかし、夫方居住の方式をとりながらも、母系出自を貫徹している社会も数多くあり、その仮説はすべての社会に適用しうるわけではない。ある社会がいかなる要因で母系出自を選択したかという、母系社会の形成史については、依然として多くの謎が残されている。

母系社会における男性の権威の対立、つまり母系パズルに関する問題についてみることにしよう。われわれの目からすれば、相矛盾する権威を内包する母系制社会は、構造的に弱く、社会の存続にかかわる重大事とうつる。その矛盾を母系社会の崩壊ないし父系社会への移行の動因としてあげる研究者もいる⁽¹⁸⁾。男性が自分のもとに妻をよび、子どもに財産を相続させることにより、その相反する地位を一元化する企てである。しかし、母系社会はそのような構造上の矛盾をもち、かつ前でみたように、社会・

經濟的變化をこうむっても、簡単に崩壊することはない。それは、多くの社会で、母系パズルを解く方法がそなえられているからである。

イギリスのオードリー・リチャーズ女史は、男性の対立する権威の調整法にもとづいて、母系社会を四つのタイプに分けている。たとえば、ナール社会では家屋と土地は女性をとおして相続されるが、兄弟がそれらを管理、運営することで、男性の権威が発揮されるのである。¹⁹⁾一方、デービッド・シュナイダーは、男性の権威は家族（家庭）的領域と社会（集団）的領域という異なるレベルにおいて配分されるしくみをもっていることを指摘する。²⁰⁾つまり、男性は子どもにたいする権威と彼の母系出自集団成員（姉妹や甥・姪）にたいする権威とをつかいわけることができるというものである。

この権威の配分説は、一九七〇年代後半からのフェミニスト人類学の分野においても、母系社会に過ぎらずあらゆる社会の男性と女性の地位差の説明にも適用されている。男性―社会的領域、特権、文化、女性―家内的領域、生殖、自然というようにレベルの異なる生活場面で男女の社会的役割がふりわけられているというものである。この二分法からうかがえるように、社会的地位においては、男性が優位で、女性が劣位という構図がうかがいあがってくる。²¹⁾

島社会の歴史

本書は、ミクロネシアのトラックとサタワルの二つの母系社会を舞台にくりひろげられる人びとの生活を描くことになる。

ミクロネシアは、日本列島の南、赤道の北側に星くずのように連なる島世界である。マリアナ、カオリン、マーシャル、ギルバートの島じま、文字どおり「小さな島」が東西六千キロ、南北三千キロの広大な海原に浮かんでいる(図2)。その数三千。しかし、人が住む島は二百にも満たない。もつとも大きな、そして観光地としてわれわれになじみ深いグアム島でも淡路島ほどである。グアム島の人口は約十一万。ギルバートとナウルをふくめるとミクロネシアの島じまには三十万余の人びとが暮している。

ミクロネシアの住民が世界史に登場するのは、太平洋でもっとも古く、一六世紀初頭のことである。世界周航の途上、マゼランは一五二一年にグアム島とロタ島にたどりついている。食料と飲料水の欠乏に悩まされた航海のはてのグアム島の「発見」であった。グアム島の住民、チャモロ族の人びとは、「貢物のしきたり」を守らずに上陸したマゼラン一行の無礼に対抗して帆船に押しかけ、ロープや金具類を奪う実力行使にでた。そのために、グアム島は「盗賊列島」として地図の上に名を残すことになった。その名はスペイン国王フィリップ四世が、一六八八年にその島に王妃マリアナにちなんで「マリアナ諸島」と命名するまでつづいた。

スペインはグアム島に総督府をおき、マニラとメキシコを結ぶガレオン船の中継地として重視した。一七世紀後半、マリアナ諸島の人びとはキリスト教の布教という、悲惨な出来事を体験することになる。軍隊の威を借りた神父や宣教師の強制的改宗である。伝統宗教を信じる人は銃弾に倒れ、その村は焼き払われた。その大量殺害にくわえ西欧人がもたらした病気のため、一七〇〇年までのわずか三〇年間でマリアナの人口は十万から二千人に激減したという。反乱を阻止するためサイパン、ティニアンなどの島の人びとはグアム島に連行された。他方でスペインは、人口を回復させるためにチャモロの人びとに

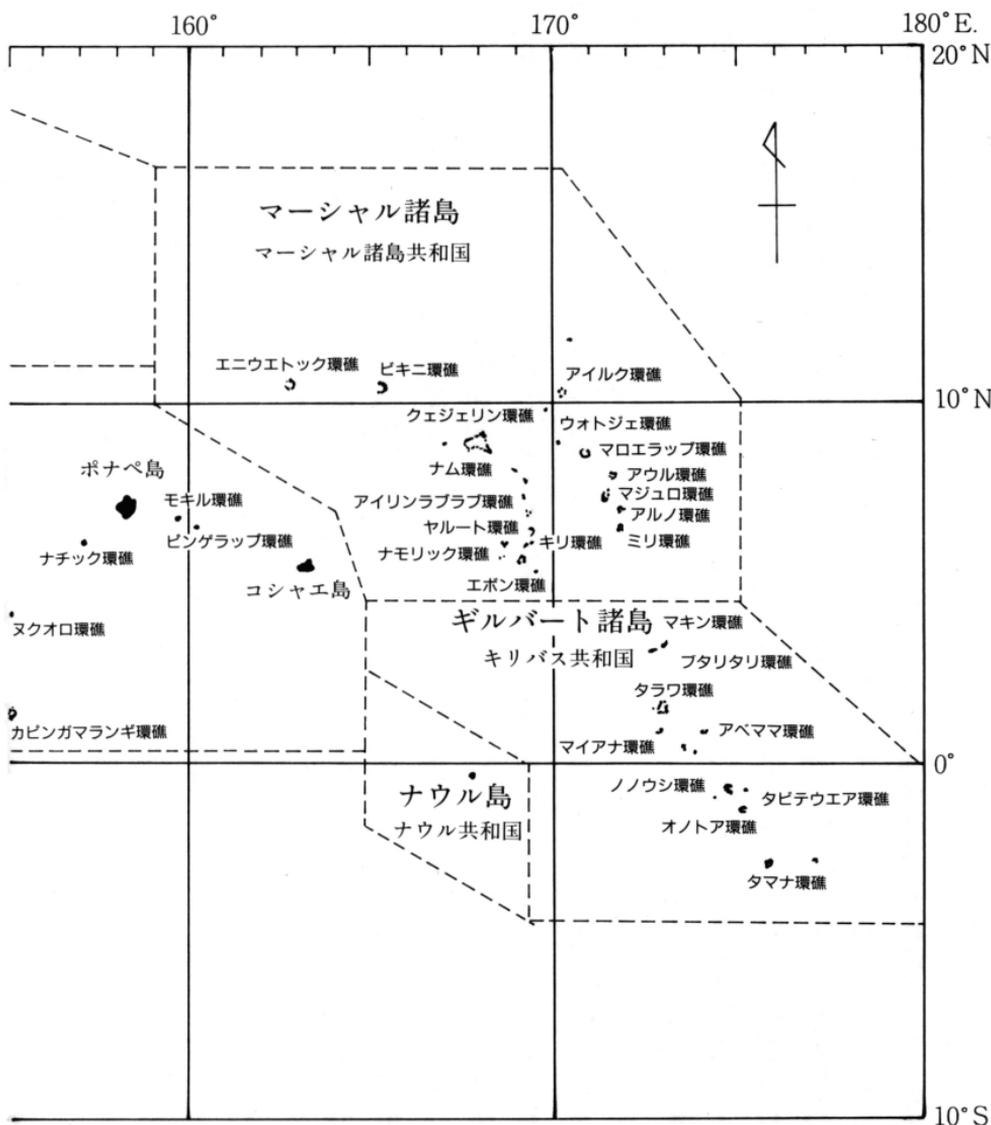
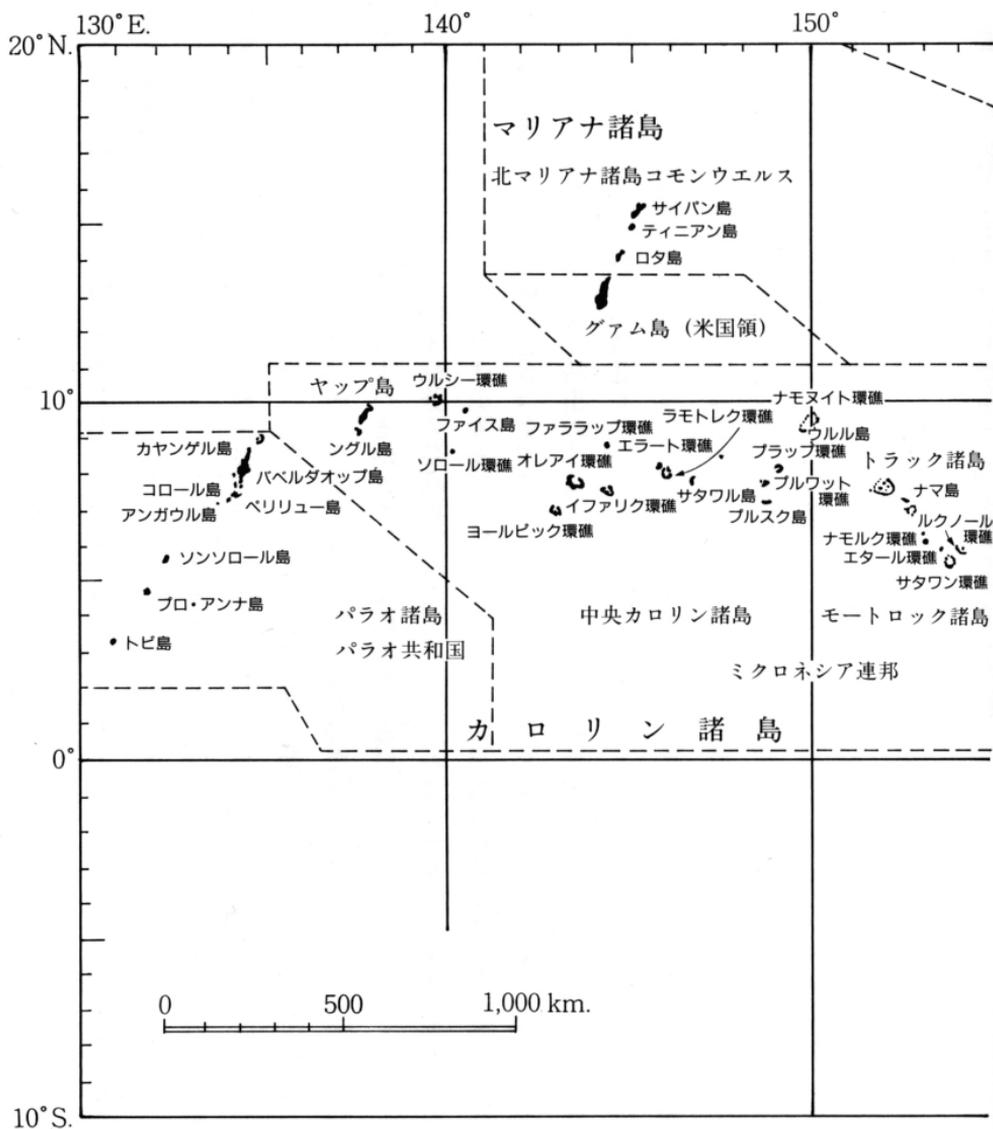


図2 ミクロネシアの地域図
(破線は、国・自治領の境界を示す)

序 母系社会とはなにか



フィリピンの人びととの結婚を奨励した。スペインは、そのほかの島じまにも宣教師を派遣したが、直接統治をしなかった。

そのころ、ヤップからトラックのあいだに散在する中央カロリン諸島の住人は、カヌーでさかんにグアムへ航海した。スペイン人から金属製品や布類など、いわゆる「文明の利器」を手に入れるためである。一九世紀初頭には島じまを襲った台風によって、人びとは「無人の島」サイパンに大移住を行った。島じまでは、酋長の指揮のもと半数の人びとがサイパンにわたったという。現在でも、その子孫は「カロリン人」とよばれ、五千人余の人びとがサイパンに住んでいる。

一九世紀後半の太平洋は、欧米列強の草刈場となる。ニューギニア、ソロモンを植民地としたドイツは、ミクロネシアに目をつけ、マーシャル諸島に進出した。その目的は英仏に対抗して領土を拡大すること、捕鯨船団の補給地確保とココヤシのプランテーション経営にあった。スペインはドイツの侵略に抗議したが、一八八五年ローマ法王の仲裁で、ドイツの既得権を認めざるをえなかった。そして、一八九九年のアメリカとの戦争に敗北したスペインは、フィピンとグアムをアメリカに割譲し、ほかの島じまをドイツに売却した。ドイツは、ポナペ島に総督をおきミクロネシア統治、とくに産業開発にのりだした。アンガウル島のリン鉱石採掘や土地制度の改革によるココヤシの植栽を促進した。しかし、ドイツの統治は一九一四年の第一次世界大戦の勃発で終了する。日本海軍が独領ミクロネシアの島じまを占領したからである。

日本は軍制のあと、一九二〇年から国際連盟の委任統治領「南洋群島」として、グアム、ナウル、ギルバートのをぞくミクロネシアの島じまを治めた。パラオのロール島に南洋庁を設置し、ヤップ、サイパン、トラック、ポナペ、マーシャルに支庁をおき植民地経営にのりだした。アンガウルのリン鉱石を別にすれば資源に乏しい島じまの統治政策は、農業と漁業の振興を基調としていた。サイパン、ティニアン、ロタでのサトウキビ栽培による製糖業は、南洋庁の財政的自立を可能にした。パラオ、トラックでの水産加工業、マーシャル、ポナペでのコブラ（ココヤシの実）生産など日本人企業の主導のもとで経済発展が進められた。島の人びとはコブラを売り渡し、日本人経営の会社や商店に勤め、現金を手にする道が開けた。昭和十五年ころには、日給一円が相場で、一ヶ月の給金は米や食料品、衣料、雑貨を購入するのに十分な金であったという。

南洋庁は、島の人びとの日本化をめざす日本語による教育制度、農業や建築などの技術指導をはじめ、生活改善、医療制度の確立をすすめた。しかし、南洋群島の住民のために産業基盤を整備し経済的自立を促進することを統治の目的にしていたわけではない。役人や教員などに登用される島の人びとは少なく、採用されたものでも「巡警」、「準教員」とよばれ、地位や給料の面で日本人とは区別され、冷遇されていた。つまり、日本の南洋群島統治は、島じまへ進出する日本人を中心に展開され、島の人びとのためのもではなかった。昭和十八年には、人口五万人の島じまに日本から九万人もの民間人が移民していた。「邦人」と「島民」という二重構造のうえになりたっていた南洋群島の産業基盤は、第二次世界大戦の終結による、日本人の「撤退」とともに無に帰してしまった。

アメリカ時代

ミクロネシア（旧南洋群島）の人びとは、一九四七年から米国の国連信託統治領太平洋諸島として、新しい統治者をむかえることになった。「戦略指定区域」の統治領ということもあって、米国はこの島じまを軍事戦略のうえで重要視した。マーシャル群島のビキニやエニウエトックでの水爆実験、クエゼリンでのミサイル基地建設など戦略構想を着々と具体化した。一九五四年にビキニで被爆した第五福竜丸事件は、われわれにも大きなショックをあたえた。米国は、一九六三年以来、財政援助額を増額する統治政策に転換した。これは第三世界における民族自決による国家の誕生という動きに触発されたものである。

米国は、統治期間の終了後もミクロネシアを傘下におくために、この地域の人びとの親米感情を高めるための方針をうちだした。具体的政策として、アメリカ人の行政官、医師、平和部隊の投入による議会、医療、教育の諸制度の確立、整備である。つまり、露骨な「懐柔策」を実施したのである。ミクロネシアの多くの島に小学校と診療所が設置され、アメリカ式教育と医療福祉の向上がはかられた。しかし、産業開発のための手だては何一つ実践されなかった。ミクロネシアの人びとの経済的自立に目をつむり、生活援助による一貫した統治政策は、世に「動物圏構想」として非難されることになる。一九八一年の信託統治領終結期においても、道路、港湾、飛行場等の産業基盤のおくれは著しく、国連視察団の勧告によって、はじめてそれらの工事に着手するありさまであった。ミクロネシアの自立後の政体に関しても、米国の「自治領」としての地位におくことをねらっていた。一九七〇年からのミクロネシア側（議会）との度かさなる交渉の結果、軍事・防衛権をアメリカの権限下におくという条件のもとに

「自由連合」という形で、ミクロネシアの自立を承認した。⁽²²⁾

ミクロネシアの国づくり

ミクロネシア議会は、一九七五年に国づくりの基本となる憲法草案を完成させ、四百年間にわたる外国支配からの自立（独立）へむけスタートをきった。憲法の前文には、つぎのように書かれている。

多くの島じまがあつまってひとつの国をつくるには、わたしたちの文化のちがいをみとめあわなければならぬ。海はわれわれをひきはなすのではなく、ひとつにしてくれる。島じまはわれわれをささえ、島国家はわれわれを強くしてくれる。「中略」ミクロネシアの国は、星を頼りに航海したときに生まれた。われわれの世界は、それ自体一つの島であった。

国づくりにとり組んだ当初、島の人びとは海洋統一国家をめざしていた。その願いと逆には、米国は極東軍事構想にとって、重要な地域とそうでない地域との色分けをし、地域の切りくずしにとりかかった。サイパンを中心とするマリアナの島じまは、ティニアン、サイパンの基地建設とひきかえに、安定した財政援助を期待しアメリカの自治領として、「北マリアナ諸島コモン・ウェルス」の名でいち早くほかの地域とたもとを分かった。そのほかの地域の足なみも乱れ、一九七八年に実施された憲法草案の可否をはかる住民投票の結果、三つの政治単位（国）に分裂してしまった。

マーシャル地区は、基地の借地料による経済的見通しがあり、「マーシャル諸島共和国」として独自

の道歩んだ。また、非核憲法のもと観光立国をめざすパラオ地区は「パラオ共和国」としての道を進むことになった。前述の憲法を承認したヤップ、トラック、ポナペ（ポーンペイ）、コシャエだけが「ミクロネシア連邦」として、ポナペを首都に、四州からなる国づくりに着手した。これらの島じまは、アメリカにとって軍事戦略上、「価値のない地域」に指定されていたのである。非核憲法の改竄をめぐる住民投票をくり返しているパラオをのぞく、ほかの二つの国は、一九八六年秋に、米国との「自由連合」交渉に調印し、正式に「国家」としての道歩み始めた。

ミクロネシアは、この百年をとってみても、スペイン、ドイツ、日本そしてアメリカと四つの国によって支配されてきた。統治者が変わるたびに、異なる制度や考え方をおしつけられたのである。そして今、ようやく、自分たちの国をつくっている。しかし、外国漁船の入漁料とコプラの輸出だけでは、国家財政をとうていまかなえない。産業のない国々には、経済的基盤のすべてをアメリカをはじめ外国の援助に依存するしかない。

ミクロネシアと私

私が初めてミクロネシアを訪れたのは一九七四年の夏である。現在のミクロネシア連邦トラック州の離島、ウルル島で四ヶ月をすごした。翌年、沖縄で開催される国際海洋博覧会の政府出展館に展示する民族標本資料の収集調査という目的であった。トラックは直径五十キロの環礁に囲まれた火山島群よりなる（図3）。人が住むのは、十四島、人口三万を数える。日本時代、本土を防衛する西太平洋の防波

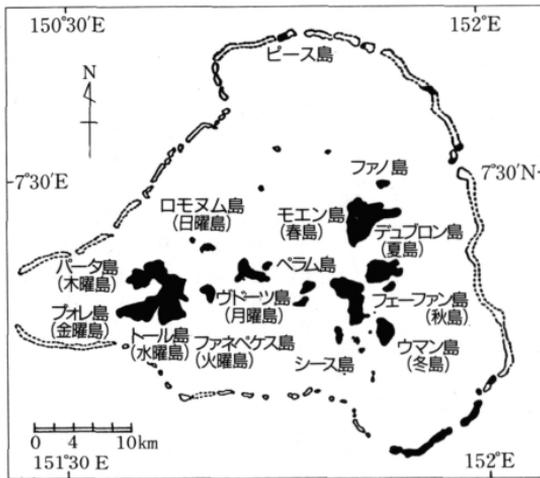


図3 トラック諸島

堤として、海軍基地の拠点となった。トラック州の主島、モエン島へはグアム島から飛行機で一時間半で行けるが、ウルル島へは船上四泊の船旅である。船便も二ヶ月に一度しかない。その島には日本時代、海軍の観測所があり十数人の兵隊と一人の商社の駐在員がいた。島の長老たちは、三十年ぶりに訪れた日本人ということ、私の一挙手一投足に熱い視線を注いだ。島にはラジオ、船外機、自動車から雑貨にいたるまで日本製品が、アメリカ製品をおしのけて入りこんでいた。彼らは、輸入する「もの」や日本の海外むけラジオ放送をとおして日本がアメリカを追い抜き、ふたたび世界一になったことをうすうす感づいていたようである。それで、物でなく「人間」

(私)をとおして、戦後の日本を知りたかったのである。そんなわけで、私は人類学のフィールドワーカーでなく、調査される側にたたき込まれてしまった。

日本人観

島の高等学校にひとりのアメリカ人青年、Y君が英語の教師として勤めていた。彼は平和部隊の一員であった。島の人びとは日本人とアメリカ人のどちらが強いかわくらべてみたかったらしく、私とY君を島の仕事や行事に「招待」した。文化人類学の調査はかれらとの人間関係をづくりあげることからはじまると観念し、私は酋長の

命令にしたがった。

まずは、島の男総出の共同漁への参加である。これは広大なサンゴ礁で五十人もの男が輪をつくり、潜水しながら魚を網に追いこむ漁法である。波が碎けるリーフ（裾礁）付近での追いこみは命がけの仕事である。早朝から午後二時まで、休む暇もなく続く。私とY君は島の男たちにおくれまいと必死だ。輪をせばめて魚を網に追いやる段階になると男たちは殺気だつ。魚は「弱い」男のところから逃げだそうと突進する。口が長く鋭い歯のあるサヨリやダツの大群の攻撃をうけるときは、目をつむって岩にしがみつくなかない。Y君がたまらず身を引いたために、漁獲ゼロという結果に終わった。それをみた男たちは、「日本人が勝った」と絶叫したのである。長老たちの目には、日本代表選手（私）のたくましい姿が、戦前の日本のつよさのイメージと重なって写ったようである。

調査地への道

そのようなミクロネシアの人びとの出会いのあとも、私は国家建設の激動期にあるミクロネシアの島じまで文化人類学の調査研究を続けてきている。島育ちのせいも、私は島で暮す人びとの生きかたに強い関心があり、ミクロネシアを訪れる前も、伊豆七島、奄美、沖縄の島じまで調査・研究を行っていた。限られた資源環境のもとで生活する人びとに共感する何かを追い求める衝動に駆られたのかもしれない。だが、そのようなロマンだけでミクロネシアへ赴いたのではない。ミクロネシアはヤップ島をのぞけば、「母系の島」であることが、戦前の日本人研究者や戦後のアメリカの人類学者の調査であきらかにされていた。男系の家筋を重視し、長男を家のあとつぎとして優遇してきた日本社会で育った私にとっては、

女系の血筋によって家をつくり、社会関係をひろげる社会のしくみを、頭の中では想像できてもその実態となると理解に苦しむ面が多かったのだ。

日本には、後継者に息子がいないとき娘に婿をとって家をつがす慣行がある。数世代にわたって女子しか生まれない家のことを、一見母・娘関係が続くという意味で「母系家族」などとよんだりする。しかし、新民法が施行され四十年たった今でも、日本には、家を父系的に相続・継承させることを第一とする考えかたが根強い。日本の婿とりや妻方居住の方法は、例外として、また一時的なものとしてみられているにすぎないようである。私は母系社会で本格的調査を行うべき準備をすすめた。一九七八年に国立民族学博物館の石森秀三氏とプロジェクトをくみ、六月から九月までヤップ島の離島、サタワル島で予備調査を行った。翌七九年から八〇年にかけては、同館の秋道智彌氏の参加をえて、サタワル島で本調査を実施した。

サンゴ礁の島

サタワル島はヤップ島（州）の東方千キロメートルの洋上に浮かぶサンゴ礁の島である。三ヶ月に一度の割で島じまを巡航する五百トンの貨客船で、十日を要す。われわれのような調査者には、客室はあてがわれない。島じまへ行政連絡に行く役人、教育庁のお偉方、医師、コブラ買いつけと商品を販売にあたる商人のための客室である。島へ帰る人びとと甲板でゴロ寝の船旅は決して快適ではない。ひとたび海が荒れれば、まともに寝てはいられない。夜中にスコールに打たれて目をさますこともたびたびある。サタワルまで十余の島じまに立ち寄る。その島に上陸するのが何よりの息抜きになる。島の人びと

が差し出してくれる若いココヤシの果汁でのどをうるおすのが唯一の楽しみ。また、初めて口にするウミガメの石蒸し料理やサシミのごちそうにもありつける。どこの島でも、異人歓待の習慣をいまだに残している。

サタワル島は、周囲六キロ、面積が一平方キロの小さな島である(図4)。一九八〇年には五百人の人が住んでいた。島のまわりにはサンゴ礁が発達しておらず、五十メートルも岸を離れば深海になる。島の男たちは、海のただなかの島とはいえ、魚をとるために百キロも離れた無人島へ出かけなければならぬ。また、数ヶ月に一度しか来ない船をあてにしているのは、他の島との交流も思うにまかせない。そのような環境のもと、サタワルの男たちは、今日でも大型のカヌーを島にある木でつくりあげて、航海に出かける。彼らは遠い祖先がみだした、星、風、波を頼りとする伝統的航海術を今に伝えている。サタワルの航海術の優秀さは、これまでに何度も実証されている。沖繩海洋博覧会のおり、六人の男たちがカヌーで三千キロの荒海をのりきって沖繩へやってきた。昨年(一九七六年)の五月には、アジア・太平洋博覧会のプレ・イベントとして、八人の男たちが福岡までの航海を成功させている。日本だけでなく、一九七六年以降、数度にわたって試みられた、ハワイからタヒチ、クック、ニュージーランドへのカヌーによる実験航海を指揮し、成功をおさめたのもサタワルの航海者であった。

伝統的航海術を今に伝える島、サタワル島は、その技術や知識を支える経済・社会・文化の面においても、「伝統性」を維持している。それがわれわれの調査地をサタワル島に決めた第一の理由である。そのほかに、サタワル島には一人の日本人芸術家が一九三一年から六年間も住みついてきた。その人、故土方久功氏は、芸術の創作活動だけでなく、サタワルの人びとの生活をありのままに記述することに

註

1.  は、森との境界
2.  は、道
3.  は、現在の居住区
4.  は、タロイモ田
5.  は、ココヤシ林
6.  は、渚および砂浜
7.  は、カヌー小屋

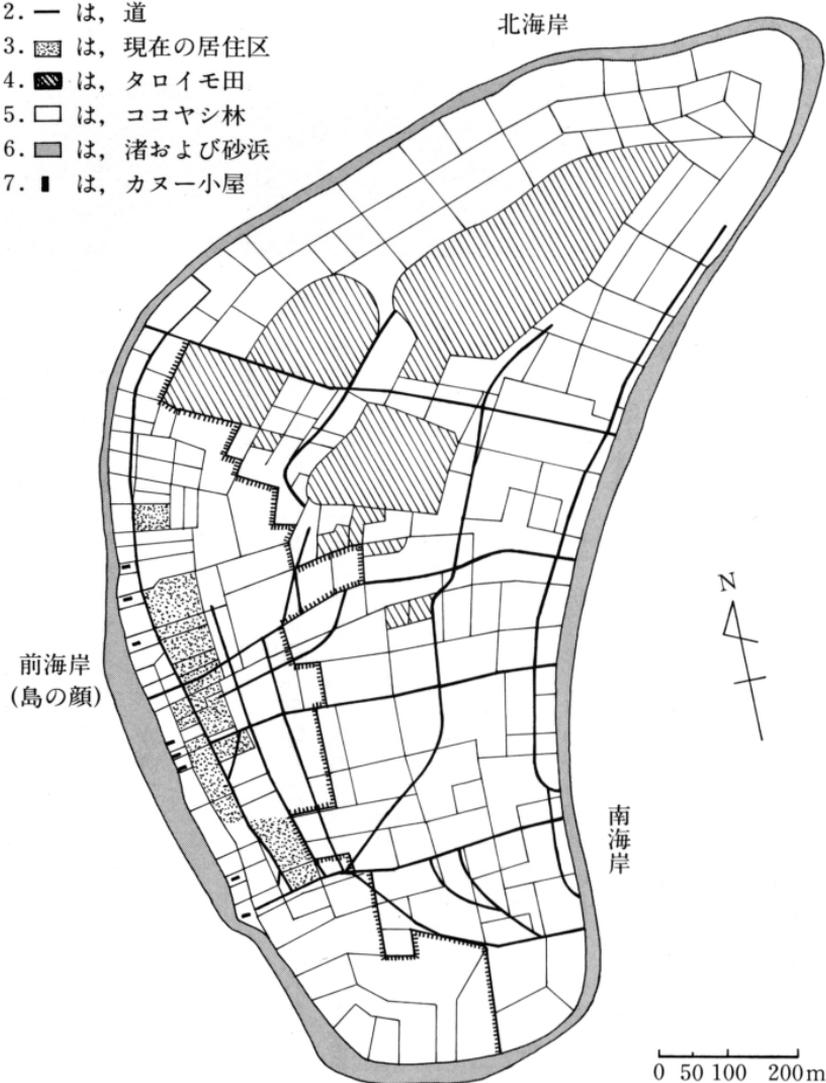


図4 サタワル島



平坦な島

も情熱をもやしていた。その成果は、四冊の著書と十編あまりの論文の形で公にされている。⁽²³⁾四十七年後に訪れるわれわれには、土方氏の調査記録が、サタワル社会の変化を見るうえで大いに役立つのである。

女性の力

私と石森氏がサタワル島へ上陸したのは、一九七八年六月末である。三ヶ月ぶりの船とあって島の人びとは、海岸に集まっている。酋長をはじめ、長老たちはカヌー小屋のなかにすわっている。二人は、若者の案内でカヌー小屋にとおされた。島に滞在し、調査をする許しをもらうためである。酋長がわれわれの申し出を快諾してくれたので、緊張感もとけ、タバコに火をつけあたりを見まわす余裕もできた。私の目に奇妙に映ったのは、老若をとわず島の女たちが這いつくばってカヌー小屋のそばを通りすぎる姿であった。「サタワルの女どもは、男がすわっているまえを立って歩いてはならない」と長老が教えてくれた。その立居振舞を見て、母系社会なのに「何と男尊女卑の習慣があるものだ」と私は強烈な印象をうけた。

私たちがおりた船でヤップへ行くサタワルの人びとが、二十名ほどいた。船と波止場のない島のあいだで人や物を運ぶのはモーターボートである。裾礁に打ち寄せる高い波の合間をみてボートを出し入れ

するのは至難のわざである。曾長の命令のもと、若者がてきぱきと船からの物資の運搬にあたっていた。ところが不運にも病気の子どもを抱いた母親をのせたボートが、波にもまれ沈んでしまった。島の酋長をはじめ、多くの男たちはその光景を海岸で目のあたりにしていた。しかし酋長は若者に、ボートの人びとを助けるべくカヌーを出すように指示しなかった。それを見た一人の年配の女性が「私にふんどしを寄せ、私がカヌーを出すから」と叫んだ。それを聞いた酋長や男たちは、ただただ下を向いたまま、何の応対もできなかった。ボートの母子は、同乗していた男たちの手で無事、船にたどりつき難なきをえた。しかし、女性に「ふんどしをつける」とすぐまれた酋長たちは、その後、自分の指揮のまささを悔いて、「女どもに顔むけできない」とこぼしていた。

多くの書物には、母系社会とはいえ社会の政治的指導者は男性（酋長）であると書かれている。しかし、その出来事を見た私は、サタワルにおける「女性のもつ力」をかいまみた思いがしたものである。それ以後、小さな島社会でくりひろげられる人びとの生活において、男性と女性の力関係、つまり権威のしくみをあきらかにすることが、私の調査テーマの一つになったのである。

私はサタワルに二度足を運び、のべ十二ヶ月にわたって島の人びとと生活をともにした。本書では、サタワルで私が見聞した人びとの生きかたをとおして、島の社会と文化のしくみを描いてみたい。第一部においては、日々の生活のようすをありのままに記述することにとめた。食生活、労働、育児と子どもの成長、性行動、結婚と夫婦生活、そして死といったテーマをとりあげ、サタワルの男性と女性の一生を紹介する。第Ⅱ部では、母系社会の構造をうかびあがらせるために、家族・親族集団と資源の利用形態、社会・人間関係の性質、そして男性と女性のあいだでくりひろげられる生産物の贈与・交換の

意味について検討をくわえる。第Ⅲ部は、世界規模の政治的・経済的システムにくみこまれた現在、サ
タワルの人びとが社会の背骨ともいうべき母系のイデオロギーと人間関係をどのように維持、存続させ
てきたか、また将来どのように変化してゆくと考えているかといった問題に焦点をあてる。そこでは、
トラック社会と比較しながら伝統的社会的変質の過程を考察してみたい。